

[研究論文]

児童の社会性を高める自発的、自治的な活動の支援プロセスに関する研究 —若年教員へのカークパトリックモデルを用いた分析を通して—

Research on Support Processes for Voluntary and Autonomous Activities that Enhance
Children's Social Skills
- Analysis Using The Kirkpatrick Model for Young Teachers -

吉 丸 一 樹

Kazuki YOSHIMARU

福岡教育大学教育学研究科教職実践専攻
スクールリーダーシップ開発コース
学校適応支援リーダープログラム/
糸島市立波多江小学校

野 口 博 明

Hiroaki NOGUCHI

福岡教育大学教職実践ユニット

(2024 年 1 月 31 日受理)

本研究の目的は、若年教員に特別活動の学級活動（１）における自発的、自治的な活動を支援するコンサルテーションを通して、若年教員の児童の自発的、自治的な活動を促す指導力を向上させ、児童の社会性を高めることである。そのために行ったことが、①朝の会・帰りの会研修、②学級活動（１）の学習過程にコンサルテーションを位置付け、③学級会セルフチェックシートの活用、④プランニングシートの活用、⑤進捗状況の報告の設定、⑥相互評価の場の設定である。また、コンサルテーションの効果をカークパトリックモデルの手法を参考に分析を試みた。カークパトリックモデルとは、教育の効果を反応、学習、行動、結果の４段階で表すものである。３箇所に位置付けたコンサルテーションを行ったことで、若年教員は、児童の自発的、自治的な活動を促す指導力を向上させた。その結果、児童の社会性を高めることができた。

キーワード：社会性、自発的、自治的な活動、若年教員、カークパトリックモデル、コンサルテーション

1 問題と目的

(1) 主題設定の理由

文部科学省（2022）は、「生徒指導提要」で「児童生徒は役割分担の過程で、各役割の重要性を学びながら、協調性を身に付けることができます。自らも集団の形成者であることを自覚し、互いが支え合う社会の仕組みを理解するとともに、集団において、自分が大切な存在であることを実感します。」と示している。小学校学習指導要領特別活動編（2017）では、「社会参画に必要な資質・能力は、集団の中において、自発的、自治的な活動を通して、個人が集団へ関与する中で育まれると考えられる。学校は一つの小さな社会であると同時に、様々な集団から構成される。学校内の様々な

集団における活動に関わることが、地域や社会に対する参画、持続可能な社会の担い手となっていくことにもつながっていく。」と示されている。

在籍校では、近年の大量退職・大量採用の影響を受け、令和４年度は６名の初任者が採用された。令和５年度は２７学級中、１３学級を採用３年目までの教員が担任をしている状況である。令和５年度の学力テストの質問紙では、「自分には、よいところがあると思いますか？」の設問で「当てはまる」と回答した児童の割合が、全国平均より４.６％低かった。また、「学校に行くのは楽しいと思いますか？」の設問で「当てはまる」と回答した児童の割合が、全国平均より２０.９％も低かった。このことから、児童の多様なよさや可能性を生かす場が少ないことや、児童の自発的、自治的な活動を学級経営の充実のための方策とせずに、教師がコ

ントロールする傾向が強い学級経営が行われていることが見えてきた。

(2) 研究主題の意味

国立教育施策研究所（2004）では、学校教育で想定されている「社会性」は、「集団活動の場で自分の役割や責任を果たす、互いの特性を認め合う、他者と協力して諸問題を話し合う、その解決に向けて思考・判断する等の能力や態度であり、さらにはそれらが自らの個性と統合され個人の資質として昇華されたものと考えられる。」と示されている。学習指導要領に示された「自発的、自治的な活動」とは、学級経営を充実させるための具体的な方策である。自発的・自治的活動とは、学級活動(1)（以下、学活(1)）の活動形態である話し合い活動や係活動、学級集会活動を自分たちで考え実践する活動にすることである。本研究では、特別活動の研究団体に所属し、特別活動の研究に長く取り組んできた報告者が学級経営の推進者である学級担任（若年教員）に対して、児童の問題状況について話し合い、自発的、自治的な学活(1)にするための具体的な指導内容について支援を行う。

「若年教員」とは、在籍校の採用2年目の教員である。「カークパトリックモデル」とは、1975年にアメリカの経済学者カークパトリックが提唱した評価・測定方法のモデルである。教育の効果を反応、学習、行動、結果の4段階で表すものであり、日本の企業でも人材育成研修で広く普及している。本研究では、報告者が行う支援内容に、若年教員が、どのような反応（満足度）をし、どんな学習（理解度）をしたかをインタビューや記述テストを実施する。また、児童にどのような指導（行動変容）をしたのかを行動観察やインタビューで確認する。

(3) 具体的方策

①朝の会・帰りの会の研修

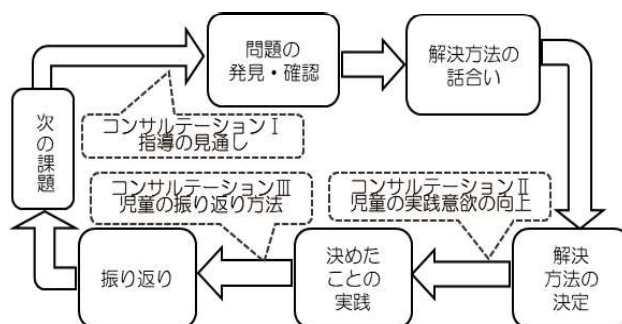
2年目となる若年教員に学級生活の基盤づくりのために4月の放課後の時間を活用して行う。具体的には、1週間の朝の会と帰りの会の時間の合計が100分あることを確認し、意図的・計画的な指導が児童の成長に繋がることを理解させる。また、2年目となる若年教員の朝の会や帰りの会を定期的に参観し、「規律に関する指導」や「他者を思いやる指導」、「児童を称賛する指導」を中心に通信にまとめ、それぞれの指導のよさを共有する。

②学活(1)の学習過程にコンサルテーションを位置付ける（図1）。

「コンサルテーション」とは、「異なる専門性や役割をもつ者同士が児童の問題状況について話し

合うプロセス（作戦会議）」（石隈, 1999）と定義されている。自発的、自治的活動の支援としてコンサルテーションを3箇所位置付ける。コンサルテーションⅠでは、学活(1)の学習過程を確認し、今後の指導の見通しがもつことをねらいとする。コンサルテーションⅡでは、児童の実践意欲を高める指導を身に付けることをねらいとする。コンサルテーションⅢでは、児童の振り返りに向けて、振り返りカードの内容や方法を理解することをねらいとする。

図1 本研究におけるコンサルテーションの位置づけ



③学級会セルフチェックシートの活用

学級会セルフチェックシート（野中, 2021）とは、教員が学活(1)に関する実践的な指導方法について自己評価するためのツールである。

④プランニングシートの活用

プランニングシート（野口, 2023）とは、学活(1)の学習過程を確認し、指導の見通しをもつためのツールである。

⑤進捗状況の報告の設定

学級のみんなで取り組んでいく過程を大切にするために、学級会で決定して実践までの期間に係ごとの進捗状況の報告を毎日行う。具体的には、毎日の帰りの会でその日の係ごとの活動を振り返り、仕事の進み具合やメンバーの頑張りを報告し、学級全体で活躍を認め合う場にする。

⑥相互評価の場の設定

児童一人一人の頑張りを認め合うために、実践後の振り返りの時に行う。具体的には、個人で振り返った後に、係ごとに振り返りを交流することで、頑張りが認め合うようにする。

(4) 倫理的配慮

本研究では、児童個人の情報公開は行わない。研究内容の公開にあたり、在籍校の校長の承諾を得ている。また児童が行うアンケートや振り返りで個人名が第三者に特定されることがないことを確認している。

2 研究

(1) 目的

著者が若年教員 E・F の学級経営力の向上を目指した児童の自発的・自治的活動の指導に関するコンサルテーションを行い、児童の社会性の「自己実現」・「集団貢献」・「他者認知」・「協調行動」の向上と、コンサルテーションの効果・自発的、自治的な活動の指導力の向上を明らかにする。

(2) 方法

①実施期間 20XX 年 4 月～20XX 年 12 月

②研究対象 2 年 X 組 29 名及び若年教員 E

1 年 X 組 34 名及び若年教員 F

E 教諭は、昨年度 5 年生を担当していた。F 教諭は、昨年度 4 年生を担当していた。

③測定内容・方法・時期は表 1 の通り

表 1 本研究の効果検証の内容・方法・時期

対象者	測定内容	測定方法	時期
児童	社会性	かつどう社会性尺度 (宮田,2019)	実践の 前後
若年 教員	コンサルテーション の効果	カークパトリック クモデル	実践中
	自発的, 自治的 な指導力	記述アンケート	実践後

表 2 カークパトリックモデルに基づくコンサルテーションの効果検証の内容と方法、時期

	評価内容	評価方法	評価時期
反応	若年教員の満足度	インタビュー	コンサルテーション直後
学習	若年教員の理解度	インタビュー・レポート	コンサルテーション直後
行動	若年教員の行動	インタビュー・行動観察	実践期間中
結果	児童の社会性	かつどう社会性尺度 (宮田,2019)	コンサルテーションの前後

表 3 「前期まとめの会」におけるコンサルテーションⅠ・Ⅱ・Ⅲの内容と若年教員 E の反応・学習・行動

	コンサルテーションⅠ	コンサルテーションⅡ	コンサルテーションⅢ
内 容	①若年教員 E の実践的指導力を把握するための「学級会セルフチェックシート」を実施 ②児童の実態を把握するために、かつどう社会性尺度の結果を共有 ③指導の見通しをもつために、プランニングシートの活用（特に必要な係と仕事内容を検討）	①実践の充実に向け、係ごとの進捗状況を帰りの会で毎日報告することの提案 ②時間内に行うために、当日の児童の動線や準備物、机や椅子の移動の確認 ③配慮を要する児童の頑張りや努力の過程を称賛することを提案	①自分や仲間の頑張りを認め合うために、係ごとに相互評価を行うことを提案 ②学級がレベルアップしたと思うことを自由記述させて、学級全体で共有することの提案
反 応	・これまででは、実践や振り返りまでの指導が不十分だった。 ・学級会でどんなことを話し合っているかわからない。 ・かつどう社会性尺度の結果は、概ね想定通りだった。 ・必要な係や仕事内容を事前に考えることができて満足だ。指導に見通しがつくことができた。	・係ごとの進捗状況の報告をすることで、「工夫したい」「学級のために活躍したい」という気持ちが高まりそう。 ・「前期まとめの会」当日も、児童の力で時間内に終わらせるようにしたい。 ・友だちと上手に関係が築けない児童のよさや頑張りを認めていきたい。	・これまで「前期まとめの会」の振り返りをしたことがなかった。自分の成長を実感できそう。 ・自分の頑張りが学級のレベルアップに繋がったことも実感できそう。 ・振り返りを丁寧に行うことで、「もっと自分を成長させたい」「学級のために自分のよさを発揮したい」という児童の意欲が高まりそう。
学 習	・学活(1)の学習過程では、実践が一番大切で児童が一番伸びるし自発的・自治的な活動も充実する。 ・話し合い、実践して振り返る活動を繰り返すことで、児童の社会性も高まる。 ・配慮を要する児童を実践で友達と関わらせ、活躍の場を与える。 ・児童からどんなことを引き出すか事前に考えることで、指導の見通しがもてる。	・「前期まとめの会」に向けて、係ごとに仕事の進捗状況を報告することで児童の活動意欲が高まる。 ・当日は児童の力で運営させる。そのために、教師は事前準備の大切さを児童に理解させる。 ・友だちと上手に関係が築けない児童は教師が意図的・計画的に児童同士をつなげたり頑張りを認めてあげたりする必要がある。	・自分たちで決めたことを実践し、自分の頑張りの過程を振り返る活動を繰り返すことで、児童の成長に繋がる。 ・係ごとに頑張りや努力の過程を相互評価することで、学級のために貢献したい気持ちが高まる。 ・学級がレベルアップしたことを共有することで、自分たちの生活をよりよくしていこうとする気持ちが高まる。
行 動	・計画委員の児童と一緒に「前期まとめの会」の活動内容や必要な係について、どんな意見が出るか考え、学級会の流れを確認した。 ・実践が充実するために、「何のために前期まとめの会をするのか」を日常的・継続的に児童に問いかけながら確認した。	・係ごとに仕事の進捗状況を帰りの会で毎日行った。その理由を聞くと、「児童の活動意欲を高めたりするためだ。」と答えた。 ・なるべく児童の力で運営させるために、「前期まとめの会」のプログラムを確認しながら動線を児童と確認した。	・自分自身の成長を実感させるために、自分の頑張りや努力の過程を振り返らせた。 ・係ごとに相互評価を行った。その理由を聞くと、お互いの頑張りを認め合うためだと答えた。また、友だちの多様よさを知り、友だち関係の広がりを期待したと答えた。

(3) 若年教員E及び2年X組 29名の結果と考察

① コンサルテーションの効果 (表3参照)

ア コンサルテーションⅠ

コンサルテーションのねらいは、若年教員Eが、学活(1)の学習過程を確認し、今後の指導の見通しがもてるようにすることである。反応段階では、若年教員Eは「必要な係や仕事内容を事前に考えることができて満足だ。指導に見通しがもつことができた。」と答えている。プランニングシートを活用して、議題案や提案理由を考えたり、話合いの柱と見通しを考えたりしたことが効果的だったと考える。学習段階で若年教員Eは、「児童からどんなことを引き出すか事前に考えることで、指導の見通しがもてる。」と答えている。これは、若年教員Eが、学活(1)における指導の見通しをもつことの大切さを理解したからだと考える。行動段階で若年教員Eは、「何のために前期まとめの会をするのか」を日常的・継続的に児童に問いかけながら確認した。これは、児童が主体でまとめの会を運営することの大切さを確認するとともに、「何のために」を全ての児童が共通理解することが、今後の実践意欲にも繋がると考えたからである。このことから、報告者が若年教員Aに行ったコンサルテーションⅠでは、学活(1)の学習過程を理解させ、今後の指導の見通しをもたせることができたと考える。

イ コンサルテーションⅡ

コンサルテーションⅡのねらいは、若年教員Eに児童の実践意欲を高める指導法を身につけさせることである。反応段階で若年教員Eは、「友だちと上手く関係が築けない児童のよさや頑張りを認めていきたい。」と答えている。これは、若年教員Eが学校適応に課題がある児童のよさを、周囲の児童に理解してもらいたいという強い気持ちがあったからだと考える。学習段階で若年教員Eは、「友だちと上手く関係が築けない児童は教師が意図的・計画的に児童同士をつなげたり頑張りを認めてあげたりする必要がある。」と答えている。これは、若年教員Eが実践の中でも意図的・計画的な指導の大切さを理解したからだと考える。行動段階で若年教員Eは、係ごとに仕事の進捗状況の報告を帰りの会で毎日行った。これは、若年教員Eが、実践における児童同士のかかわりを大切にして、児童の力で運営する価値を理解したからだと考える。このことから、報告者の若年教員Eに対するコンサルテーションⅡは、児童の実践意欲を高めようとする指導力を身に付けることができたと考える。

ウ コンサルテーションⅢ

コンサルテーションⅢのねらいは、振り返り活動における振り返りカードの内容や方法を理解させることである。反応段階で若年教員Eは、「振り返りを丁寧に行うことで、『もっと自分を成長させたい』『学級のために自分のよさを発揮したい』という児童の意欲が高まりそうだ。」と期待を膨らませて答えた。これは、若年教員Eがこれまでの取組における児童同士を意図的・計画的なかかわりに手応えを感じているからだと考える。学習段階で若年教員Eは、「自分たちで決めたことを実践し、自分の頑張りと努力の過程を振り返る活動を繰り返すことで、児童の成長に繋がる。」と答えた。これは、若年教員Eが児童の自発的、自治的な活動が充実することで、学級の雰囲気が支持的なものになることに気付いたからだと考える。行動段階で若年教員Eは、係ごとに相互評価を行った。これは若年教員Eが、相互評価を通して「友だちと上手く関係が築けない児童」がたくさんの友だちから評価され自分のよさに気付くことができると感じたからだと考える。このことから、報告者が若年教員Eに行ったコンサルテーションⅢでは、振り返りの内容と方法を理解させることができたと考える。

② かつどう社会性尺度の結果の変容より

表4 2年X組のかつどう社会性尺度の変容

領域名	質問項目	コンサル テーション前	コンサル テーション後	
自己実現	1. 自分のよさをかつどうに出すことができた。	3.66	4.45	*
	2. 自分のかつどうは、ほかの人からみとめてもらえた。	3.50	3.87	
	3. このかつどうをして自分にしんがった。	3.54	4.33	*
	4. 自分がやってみようとおもったことは、あきらめずにとりくめた。	4.08	4.63	*
	5. 自分なりに、かつやくできた。	3.83	4.37	*
集団貢献	6. よく知らなかった人に自分から声をかけることができた。	3.70	4.08	
	7. みんながいっしょにできるように、ささたり、声をかけたりした。	3.75	4.12	
	8. このかつどうがうまくいくように、じゅんびやしごとをした。	3.66	4.54	*
	9. いつもめあてのことを考えながら、かつどうした。	3.41	4.04	*
	10. みんながかつやくできるように、はげますことができた。	3.75	4.16	
他者認知	11. 自分なりにみんなのやくに立つ、行どうができた。	3.25	4.04	*
	12. 自分のやりたいことをゆずって、協力している人がいたと、分かった。	3.62	4.29	*
	13. いろいろなことを、ほかの人から教えてもらえた。	3.79	3.87	
	14. めてをまもって、みんなと、かつどうすることができた。	3.79	4.41	*
	15. 協力できても、その人たちの考えはすべて同じではないと、分かった。	4.04	4.16	
協調行動	16. みんなのよさは、一人一人がうと分かった。	4.50	4.41	
	17. さいごまでみんなといっしょに、かつどうできた。	4.16	4.66	
	18. 気のあわない人とは、いっしょに、かつどうできなかった。	3.35	3.43	

N=29 注1 Max=5、Min=1 注2 *p<0.05

表4より、アンケート項目の16以外の項目で得点の増加がみられた。アンケートの項目の結果について、平均点の差異を比較するために対応ある t 検定を行ったところ、アンケート項目の1, 3, 4, 5, 8, 9, 11, 12, 14に有意性がみられた。

「自己実現」の項目1, 3, 4, 5で有意性がみられたのは、振り返りを丁寧に行ったからである。具体的には、「前期まとめの会」における自分の頑張りを振り返ったり、係ごとに相互評価の場を設定して互いの頑張りを認め合ったりしたからだと考える。

「集団貢献」の項目の8, 9, 11で有意性がみられたのは、「前期まとめの会」を児童の力で運営するために、係活動が活性化したからである。具体的には、会を児童が進行をしたり盛り上げるための飾りつけをしたりしたからである。また、若年教員Eも児童と一緒に、動線や机・椅子の移動について考えたからである。

「他者認知」の項目の14で有意性がみられたのは、係ごとの進捗状況を帰りの会で毎日報告をしたからである。「前期まとめの会」を成功させるために、係ごとに仕事内容を話し合ったり、その日に行った仕事内容を学級に伝え合ったりしたからである。

③児童の振り返りカードをA I テキストマイニング(株式会社 UserLocal)で分析した結果より図2より、児童の振り返りカードの記述内容をA I テキストマイニングで分析した結果、「考える」「行動」「できる」「協力」「あきらめる」「一緒に」のキーワードに関連性が見られた。具体的な記述では、「友だちと協力して係の仕事をする事ができた。」「あきらめずに仕事に取り組むことができた。」「時間を考えて行動することができた」等があった。これは、若年教員Eが「前期まとめの会」に向けての事前準備を大切にしたり、なるべく児童の力で運営をさせたりしたからだと考える。また、「メダル」「飾り」「づくり」「楽しい」「難しい」や、「チーム」「ルール」「工夫」のキーワードに関連性が見られた。これらに関連性が見られたのは、「前期まとめの会」に向けての係活動が活発になり、同じ係のメンバーと楽しみながら準備を進めることができたからだと考える。

④若年教員Eの記述アンケートより

表5より、若年教員Eの児童への自発的、自治的な活動を充実させる指導力が高まった。学級会の後の実践に向けての準備で、係活動を活性化させ、かわりを増やす指導を行ったからである。また、児童に任せることも大事にして、2年生な

りの発意・発想を生かせる場を設定したからである。更に、「前期まとめの会」の後の振り返りで、相互評価を行い、よさや頑張りを自覚させたからである。

図2 A I テキストマイニングの結果

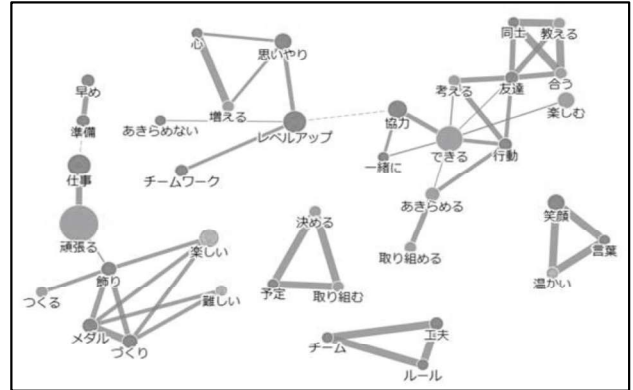


表5 若年教員Eの記述アンケート

昨年までの学級活動(1)の指導では、ここまで丁寧にこだわりをもって行うことができていなかった。学級会の後は、そんなに重視していなかった。今回のコンサルテーションで、学級会の後のみんなで実践することが大切だと分かった。特に、児童に「前期のまとめの会」当日の運営をさせるために、係活動を活性化させ児童の発意・発想を大切にしたり、児童と一緒に当日の動線や机・椅子の移動について考えたりしたことで、児童の実践意欲が高まってきた。また、「前期まとめの会」の後、すぐに振り返りを行い、係ごとに相互評価をしたことで、友達の頑張りが多様なよさに気付くことができた。

コンサルテーションⅠを位置付けたことで、若年教員Eはプランニングシートを活用して、仕事内容や必要な係を事前に検討した。その結果、計画委員会の児童は学級会の際、見通しをもって進めることができた。

コンサルテーションⅡを位置付けたことで、若年教員Eは、児童の自治的、自発的な活動を充実させるために、当日の細かい動きまで児童と一緒に考えた。その結果、児童の力で「前期まとめの会」を運営することができた。

コンサルテーションⅢを位置付けたことで、若年教員Eは、振り返りで相互評価を行った。その結果、児童は自分のよさや頑張りを認められ、友だちの輪が広がった。

以上のことから、3箇所位置付けたコンサルテーションは有効であったと判断する。次にコンサルテーションを行う若年教員Fは1年生担任なので、計画委員会の指導や児童がみんなで決めたことを協力して実践していく楽しさを実感できる指導ができるようにしていきたい。

表6 「水を大切に作る取組を考えよう」におけるコンサルテーションⅠ・Ⅱ・Ⅲのねらいと若年教員Fの反応・学習・行動と結果

	コンサルテーションⅠ	コンサルテーションⅡ	コンサルテーションⅢ
内 容	①若年教員Fの実践的指導力を把握するための「学級会セルフチェックシート」を実施 ②児童の実態を把握するために、かつどう社会性尺度の結果を共有 ③指導の見通しをもつために、プランニングシートの活用（計画委員会の指導や実践の仕方を中心） ④学活(1)の基本的な進め方を理解するために、「学級会デジタルコンテンツ」で視聴	①実践の充実のために、係ごとの進捗状況を帰りの会で毎日報告することの提案 ②かつどう社会性尺度の結果が低かった児童の強みやよさを生かすために、どのような場面でどのように発揮させるかを確認 ③取組中は、毎日、水を大切にすることができたかを確認していくことを提案	①自分や仲間の頑張りを認め合うために、係ごとに相互評価を行うことを提案 ②学級がレベルアップしたと思うことを自由記述させて、学級全体で共有することの提案 ③1年生で学級の諸問題を解決する取組を考えて、実践したことに価値があることを児童に伝えることを提案
反 応	<ul style="list-style-type: none"> 学級の諸問題を解決する議題に挑戦してみたい。 学活(1)の学習過程が理解できた。学級会で終わりではない。 気になる児童を活躍させる場を意図的・計画的に設定していきたい。 計画委員会の指導のイメージがあまりもてないで、一緒に指導の指導をしてもらいたい。 	<ul style="list-style-type: none"> これまで係の進捗状況報告をしたことがなかったが、児童の実践意欲が高まりそうだ。教師も一緒に確認していきたい。 気になる児童は休み時間の係活動の様子や水を大切に使っている姿を、しっかり評価していきたい。 やはり実践が大切で、毎日、水を大切に活用できたかどうか確認していく。 	<ul style="list-style-type: none"> これまで、学級会をして、実践したことを振り返る指導が不十分だったので、挑戦してみたい。 相互評価では、たくさんの評価をもらえて、気になる児童も学級への所属感が高まりそうだ。 集会活動ではない議題について話し合い、実践したことをしっかり称賛したい。
学 習	<ul style="list-style-type: none"> 学級会でできたことを、みんなで実践をして振り返りをすることで、児童が成長する。 低学年での自発的、自治的な活動の体験が、高学年になった時の委員会活動に生かされる。 自分の活躍が学級の役に立っているという気持ちにさせることが大切である。 	<ul style="list-style-type: none"> 実践が一番大切で、児童の意欲を継続させなければならない。そのために、係ごとの進捗状況の報告は必要である。 気になる児童には、実践でも意図的に教師がかかわっていく。 教師も学級会で決まったことは本気で実践していくことで、児童の実践意欲も高まる。 	<ul style="list-style-type: none"> 振り返りをする中で、自分の頑張りがどのように学級に貢献できたか明確になる。 学級がレベルアップしたことを学級全体に共有することで、次の学級会への意欲にも繋がる。 学級会で決め、実践して振り返る活動を繰り返すことが大切である。
行 動	<ul style="list-style-type: none"> 1年生のうちから学級会で決めたことを実践する大切さを伝えていた。 児童と一緒に計画委員会の仕事の確認や学級会の流れをシミュレーションしていた。その中で、学級会の振り返りでは、決まったことに対して自分はどう頑張るかを書かせるように助言した。 	<ul style="list-style-type: none"> 帰りの会で係ごとの進捗状況を報告させて、教師も一緒に確認をした。 気になる児童には、係活動の頑張りが水を大切にしている姿を称賛していた。 児童の活動意欲を更に高めるために、教師自身も学級会で決まったことを児童と一緒に実践した。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の頑張りが学級に貢献できたことを理解させるため、係ごとに相互評価を行なった。 学級会で決め、実践すると学級が過ごしやすくなるという体験をさせるために、学級がレベルアップしたことを学級全体で共有した。 気になる児童には、頑張りが成長したことについて声をかけていた。

(4) 若年教員F及び1年X組34名の結果と考察

①コンサルテーションの効果（表6参照）

ア コンサルテーションⅠ

反応段階で若年教員Fは、「学級の諸問題を解決する議題に挑戦してみたい。」と答えている。プランニングシートを活用する中で、児童の意欲を高めるためには、議題選びの大切さに気づいたからだと考える。学習段階で若年教員Fは、「低学年での自発的、自治的な活動の体験が、高学年になった時の委員会活動に生かされる。」と答えている。これは、低学年段階から自発的、自治的な活動を意図的・計画的に仕組むことで、児童の成長による影響を与えることを理解したからである。行動段階で若年教員Fは、児童と一緒に計画委員会の仕事の確認や学級会の流れをシミュレーションしていた。これは、若年教員Fが低学年の段階から、児童の力で学級会を計画・運営することの大切さ

を理解したからだと考える。このことから、報告者が若年教員Fに行ったコンサルテーションⅠでは、学活(1)の学習過程を理解させ、今後の指導の見通しをもたせることができた。また、低学年の段階における、自発的、自治的な活動の大切さに気づかせることができた。

イ コンサルテーションⅡ

反応段階で若年教員Fは、「これまで係の進捗状況報告をしたことがなかったが、児童の実践意欲が高まりそうだ。教師も一緒に確認していきたい。」と答えている。これは、若年教員Fが、みんなで決めたことを協力して実践していく過程も重要なことに気づいたからである。学習段階で若年教員Fは、「実践が一番大切で、児童の意欲を継続させなければならない。」と答えている。これは、学活(1)の学習過程で実践の段階が一番児童同士のかかわりが増え、社会性が高まることを理解したか

ウ コンサルテーションⅢ

表7 2年X組のかつどう社会性尺度の変容

N=34 注1 Max=5, Min=1 注2 *p<.05

「協調行動」の項目の17で有意性がみられたのは、学級会後の実践を大切にしていたからである。係が描いたポスターを意識して、水を出す量を自分なりに考えたり、バケツに入れる水の量を少なめにしたりする等、学級のみんなで決めたことを実践したからだと考える。

図3 AIテキストマイニングの結果

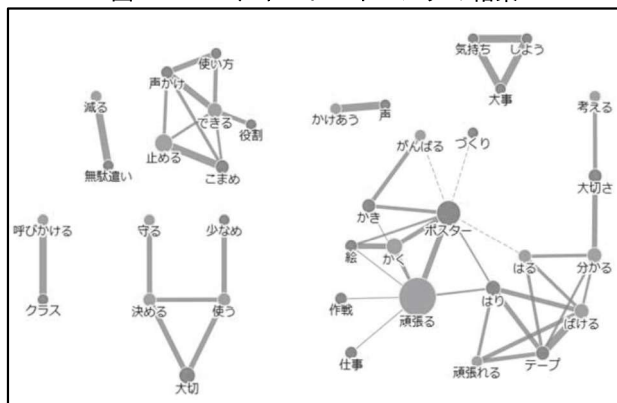


表8 若年教員Fの記述アンケート

児童が意欲的に係の仕事を頑張っていた。1年生なので、創意・工夫がたくさん見られるということはないが、「学級のために自分の力を発揮したい。」「学級がよりよくなるために、貢献したい。」という思いは、あったようだ。やはり学活（1）は、児童が「自分事」として捉えることができるかが、ポイントだと思った。そのために担任として、どんなしかけをするか？も大切だと感じた。今後、集会活動やイベントを企画する際も、児童が計画・運営する場を多く確保していきたい。また、その中で、児童同士のかかわりを意図的・計画的に仕組んでいきたい。

③児童の振り返りカードより

図3より、児童の振り返りカードの記述内容をA Iテキストマイニングで分析した結果、「少なめ」「使う」「大切」「決める」「守る」のキーワードに関連性が見られた。具体的な記述には、「水をつかう時は少なめに使う。」「みんなで水の使い方について話し合ったので、守っていく。」等の記述があった。これは、児童が水を大切にする議題で学級会を行い、みんなで決めたことを守っていこうとする自発的、自治的な実践に繋がったからである。また、「ポスター」「頑張る」「仕事」「作戦」「絵」「かく」のキーワードに関連性が見られた。これは、「水を大切にする取組」に向けての係活動が活発になり、同じ係のメンバーと協力ながら準備を進めることができたからだと考える。

④若年教員Eの記述アンケートより

表8より、若年教員Fの児童への自発的、自治的な活動を充実させる指導力が高まった。これは、若年教員Fが学級の実態に合った議題を計画委員会の児童と一緒に考え、児童に「自分事」として捉えさせるようにしたため、児童が「水を大切にする取組」についての実践が充実したと考える。また、1年生なりに全員に仕事を与え、係活動をおこなったことで、児童の実践意欲が高まったと考える。

3 考察

本研究では、若年教員に自発的、自治的な学活(1)にするための具体的な指導内容についての支援を行った。その結果、児童の社会性を高めることができた。野口(2011)は「特別活動には『なすことによって学ぶ』という指導原理がある。このことは、たださせておけばできるようになるということではない。」と述べている。このことから、3箇所に位置付けた若年教員へのコンサルテーションが有効だったと考える。学活(1)の指導は学級会を重視することが多いが、ねらいをもってコンサルテーションを行ったことで、若年教員は、実践や振り返りにおける児童の自発的、自治的な活動を促す指導力を高め、児童の社会性の向上に繋がったと考える。文部科学省(2016)は、「かつては、教員に採用された後、学校現場における実践の中で、経験豊富な先輩教員から経験の少ない若手教員へと知識・技能が伝承されることで資質能力の向上が図られてきたという側面が強かった。しかしながら、近年の教員の大量退職、大量採用の影響により、必ずしもかつてのような先輩教員から

若手教員への知識・技能の伝承がうまく図られていない状況がある。」と述べている。また、文部科学省(2021)は、「教師同士の相互作用で教員の集団の力を最大限に高めていく」とも述べている。本研究のコンサルテーションは、「特別活動の学活(1)」に関するものが中心であったが、「学習指導」や「生徒指導」、「特別な配慮や支援を必要とする子供への対応」等にも一般化できるものだと考える。

主な引用・参考文献

- 福岡県教育庁福岡教育事務所「令和2年度教育調査報告書（人事給与統計調査）」。
- 林幸克(2011)「学級経営 ホームルーム経営の理論と実践」三恵社。
- 池上詠子(2019)「自発的・自治的活動を中心とした学級経営の充実-学級活動(1)を校内研究に位置付けた研究推進部や学級担任へのコンサルテーションを通して」福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教職大学院 年報(9), 209-216。
- 文部科学省(2016)「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について(中間まとめ)」。
- 文部科学省(2017)小学校学習指導要領解説特別活動編
- 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター(2019)『特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動(小学校編)』文溪堂。
- 文部科学省(2021)「教師の求められる資質能力の再整理」。
- 野口博明(2011)「特別活動で子どもが変わる!新しい評価と指導のモデル集」小学館。
- 白松 賢(2017)「学級経営の教科書」東洋館出版社 154-189。
- 脇田哲郎(2019)学級経営の充実に資する小学校係活動の研究-居心地の良い集団による遊びを基盤とする活動を通して- 福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻(教職大学院)年報(9), 139-146。
- 脇田哲郎(2022)人間関係に関する議題を話し合う学級会を実施した担任の指導観~小学校教員へのインタビュー調査を通して~福岡教育大学大学院教職実践専攻(教職大学院)年報 (12), 159-166。
- 柳井文陽(2021)「子供の学校適応を促進する学級活動の研究-子供に任せる活動の充実を通して-」福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教職大学院 年報(11), 165-172。

本研究において第一著者は、研究の計画、在籍校での実践、データの取得・分析・解釈の全てを担当した。第二著者は、主に研究の計画およびデータの解釈において、第一著者とともに協議・検討を行った。